Kansai University Repository
このページは自動生成のため、本来の表記と異なる場合があります。

異系統土器の共存からみた九州縄文文化の研究［全文の要約］

著者	山下 大輔
発行年	2021-03-22
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416乙第522号
URL	http://doi.org/10.32286/00027367

文学研究科 2020 年度

異系統土器の共存からみた九州縄文文化の研究

山下　大輔

論文要旨

本論では、南九州の縄文時代早期中葉期の土器型式編年の確立を目指し、当該時期の土器資料の分析を行う。その際に、在地の貝殻文円筒形土器だけでなく、この時期に西日本一帯に展開していた押型文土器や、九州島内に広域分布を有す政所・中原式土器、東南部九州の地域型式である別府原式土器なども視野にいれ、複数系統・系列の土器型式の総合的な編年観の提示を目指す。

さらに、検討の結果示したような土器型式編年にみられる異系統土器間の関係性の解明と、その背後にある人間集団の行動や集団間の関係性、それらが生み出す社会変化についても明らかにすることを目的とする。

第1章では、南九州の押型文土器研究に焦点を当て、その研究史をアカホヤ火山灰の発見前と発見後に区分して概観し、今日的な研究レベルでの問題点の洗い出しを行った。その中で、押型文土器は、貝殻文円筒形土器に少量伴う外来系の土器として理解されてきたことを指摘し、南九州独自の押型文土器編年の必要性を再確認した。

このような貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係については、遺跡内での両土器群の出土状況や両者の要素を取り入れた折衷的な土器の検討、炭素 14 年代測定値からの位置づけ、さらには押型文土器の型式編年に基づく貝殻文円筒形土器との関係性の追求、といった複数の視点からのアプローチがあることを確認し、各方法論に関して現時点での到達点と問題点を明確にした。遺跡内での確実な一括性が担保された出土事例がみられないことが影響し、現況ではこの時期にみられる異系統土器の関係性については定説をみていない。

しかし、筆者がこれまで実践してきた押型文土器の編年や遺跡内での共出状況、さらには「五十市式土器」など折衷的な要素をもつ土器の分析から、南九州の押型文土器と貝殻文円筒形土器の大部分は並存関係にあり、最終段階でようやく押型文土器の単純期を迎えたことを明らかにした。さらに、この時期の南九州には貝殻文円筒形土器と押型文土器以外にも、政所・中原式土器や別府原式土器など複数の土器系列が展開して

いたことも導き出した。

また、以前から指摘されてきた「桑ノ丸式器形の押型文土器」は外面の施文方向が縦方向であることや、それ以前にも横位・斜位施文の円筒形押型文が展開していたことを重視して、大分編年の各土器型式の中でも後半段階の下菅生 B 式土器以降の資料との併行関係を再確認した。

このような見解に基づき、異系統土器の共存という現象の背後にある人間集団の動態に関し、土器資料の観察と遺跡での出土状況から考察するという本論での課題を示した。

第2章は、筆者がこれまで実践してきた土器編年、特に南九州の縄文時代早期中葉期の編年について個別に論述し、それぞれの土器系列の相互関係の解明を目的とした。

第1節では、これまでの先行研究では時間的に前後する型式群と理解されていた下剥峯式土器と桑ノ丸式土器の再検討を行った。ここで器形や口縁部形態、文様構成に焦点を当てて分析した結果、両型式ともに同様のバリエーションと変化の方向性を有することから、時間的に併行する同時期の土器群であることを明らかにした。また、これらの土器群は口縁部文様帯の有無、外面施文の方向などの変化から、少なくとも4段階の変遷過程が存在することを示した。

第2節においては、筆者独自の南九州における押型文土器の編年を提示した。当該地域では、それまで研究の進んでいた大分地域で示された編年をそのまま援用することが多かった。しかし、南九州独自の編年が必要と考え、宮崎・鹿児島両県の出土資料を総合的に検討し、押型文土器を13の類型に整理・分類し、当該地域における押型文土器の流入期である第1段階から押型文土器の単純期となる第4段階までの各段階を時間軸上に配列し、南九州独自の編年を提示した。その結果、従来から注目されてきた「桑ノ丸式器形の押型文土器」は南九州押型文編年の第3段階の資料であること、さらにそれに先行して第1段階から横位施文の円筒形押型文土器が展開していたことを追認した。また、第4段階には、南九州でも押型文土器の単純期を迎えたことを指摘した。

第3節では、南九州の押型文土器の地域性を探る中で、宮崎中南部から大隅半島北部を中心に分布する「白ヶ野下層式土器」の設定を行った。

この土器型式は、口縁部内面の稜とそれ以下の内面がケズリによって調整されるという特徴を有す。また、口縁部の屈曲度と内面稜の文様帯の拡大という変異から、古段階と新段階の細分が可能であり、特徴となる器形と内面の調整技法の類似性から、桑ノ丸式土器の影響を受けて成立した土器型式であることを示した。

さらに、白ヶ野下層式土器の成立と展開は南九州独自の押型文土器の開花を意味し、当該土器型式の新段階の成立が南九州でも押型文土器の単純期が存在したことの傍証になると考えた。

第4節では、南九州の円筒形押型文土器の編年的位置づけを考える際に重要な位置を占めている、西北九州に分布する「弘法原式土器」について再検討を加えた。

南九州で出土する桑ノ丸式器形の押型文土器は、以前からこの弘法原式土器との類似性が指摘され、それ故に押型文土器の中でも最も古手の資料と位置づけられていた。しかし、本論では両型式の詳細な観察から、口縁端部の作りや内面調整技法、胎土の相違を確認し、これらの土器型式は全くの別物で、従来言われていたように南九州の桑ノ丸式器形の押型文土器を古い段階の資料とする見解は根拠に乏しいことを指摘した。

また、弘法原式土器との関連性を有するのは、桑ノ丸式器形の押型文土器に先行して展開していた横位・斜位施文の円筒形押型文土器であることを示した。

第5節においては、長崎県島原半島や熊本県を中心に分布すると考えられていた中原式土器について、宮崎県内でも多数出土していることを出土遺跡の集成を行うことで確認した。宮崎県内全域で出土が確認されているが、単独で出土することや、他の土器群と比べても主体的に出土することは皆無であることを指摘し、南九州の在地土器ではなく、やはり他地域からの流入してきた外来系の土器であることを確認した。当該土器の胎土には大きめの角閃石が多く含まれ、色調も茶褐色系を呈する貝殻文円筒形土器に対して黄橙色系を呈するものが多いことから、熊本地域からの搬入品と考えられる資料であることを示した。さらに、同一遺跡内での他型式土器との共出関係からは、別府原式土器や下剥峯・桑ノ丸式土器、押型文土器と一緒に出土する傾向にあることを示した。

第3章においては、異系統土器の要素を取り入れた折衷土器の存在から、第2章で示した編年観の根拠を補強することを目的とした。

第1節では、「五十市式土器」を取り上げ、改めて口縁部形態の分析を行った。その結果、従来の桑ノ丸式土器との関係性が認められるとする説を追認した。

また、施文される文様が南九州では珍しい縄文であることから、南九州の桑ノ丸式土器の器形に西日本一帯に分布する押型文土器に伴う縄文施文土器の文様が施文された折衷的な土器であることを指摘した。

第2節では、前節において分析を加えた「五十式土器」の型式的特徴の一つである、口縁端部の刺突という属性に着目し、その編年的位置づけを再度検証した。五十市式

土器が出土した宮崎県都城市内の遺跡から出土した関連資料を俎上に載せ、それぞれの資料の特徴を抽出した。その結果、五十市式土器と同様に口縁部内面に刺突文を有す資料は押型文土器に多いことを確認した。さらに、刺突の形態や施文方法などから、刺突自体は押型文土器にみられる原体条痕から派生したものである可能性を考えた。

また、もう一つの特徴である五十市式土器の「縄文」に関しては、やはり押型文土器に伴って出土する縄文施文土器の影響があるものと推測した。

このような検討結果からは、五十市式土器に施文される縄文も押型文土器に関連すると考えたが、文様以外の属性からみても、五十市式土器と押型文土器は強い関係性があったものと結論づけた。

第3節では、岡本東三氏が提示した南九州の押型文土器およびその周辺の土器群についての編年案を検証し、その妥当性を考察した。

岡本氏は、政所式と別府原式との近縁性を指摘した上で、別府原式から政所式への変遷を想定し、中原Ⅲ～Ⅴ式と政所式の間に別府原式を措き、従来の編年観とは逆方向への変遷を考えた。しかし、底部形態に着目しても、岡本氏が示した編年観には無理があり、筆者は従来の政所式（中原Ⅱ式）から中原Ⅲ～Ⅴ式への編年観を支持した。さらに、岡本氏は、円筒形押型文土器として弘法原式土器を政所式の後に位置づけるが、これも底部形態の変化の方向性を考慮すると蓋然性が低い。

このように、岡本氏と筆者の編年観は政所・中原式土器や弘法原式土器の位置づけなどの点で相違するが、これまでの円筒形押型文土器をはじめとする土器資料の検討および遺跡での出土状況を根拠とし、筆者の編年観がより蓋然性が高いことを示した。

第4章は、遺構内での共出事例から、異系列土器群の関係性を検討し、土器型式編年で導き出した結論の妥当性を検証・補強することを目的とした。

第1節では、再度貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係に関するこれまでの研究史を確認した。筆者のこれまでの研究からは、貝殻文円筒形土器（下剥峯・桑ノ丸式）と押型文土器、特に後半段階の資料には強い関係性がみられることを確認していたが、ここでは遺構内で共出した事例を取り上げて検討を加えた。対象は宮崎県内で確認されていた4遺跡に近年宮崎市で確認された上猪ノ原遺跡第4地区を追加した5事例である。

これらの出土事例を詳細に検討した結果、下剥峯・桑ノ丸式土器と押型文土器の大部分が時間的に併行関係にあること、すなわち異系統の土器が併存していたという結論を導き出した。しかも、土器の型式学的検討から導き出した結果と同様に、大まかな傾向

として、下剥峯・桑ノ丸式の前半段階と押型文土器の前半段階が、下剥峯・桑ノ丸式の後半段階と押型文土器の後半段階が共出関係にあることを確認した。

第2節では、筆者が調査を担当した宮崎県都城市所在の王子山遺跡で確認された縄文時代早期の炉穴に焦点を当て、煙道を共有しながら二つの炉穴が上下に重なる特異な炉穴を紹介するとともに、宮崎県内で検出された炉穴の集成を行った。

集成からは、これまで鹿児島県では早期前葉に盛行するとされた炉穴が、遺跡内で供出する土器型式を分析すると、宮崎県では早期前葉末から中葉にかけて時期差をもって展開していた可能性が高いことを指摘した。

さらに、炉穴内から貝殻文円筒形土器の石坂式と、宮崎平野部を中心に展開する地域型式である別府原式土器が共出したことを確認し、これを異系列土器の共存状況を示す事例と考えた。

第5章では、これまで本論で示してきた南九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係性について、考察の結果を述べた。また、政所・中原式土器や別府原式土器も含めた異系統土器が同時期に共存したことを示す、筆者独自の総合的な編年案を提示した。

このような編年観から導かれる結論として、当該時期の南九州では、これら二つの系統だけでなく、別系統・別系列と考えられる土器群が微妙に分布域を違えながら展開していたことを明らかにした。さらに、これら複数系列の土器群が同時期に共存していた現象の背後にあるであろう、土器製作者の移動と土器情報の浸透・定着の過程とその要因についても考察した。

その結果、南九州における異系統土器の流入・定着は常に一定のペースで実現したものではなく、各系統・各系列でその様相は異なることを示した。つまり、いかなる状況でも採用できる一般法則ではなく、土器製作者の移動と定着、土器の地域的変化の発現のパターンにはいくつかの類型が認められることを確認した。その中で、押型文土器は一気に南九州に流入し、在地の円筒形押型文土器文化と融合したのではなく、継続的且つ波状に土器情報がもたらされた結果、早い段階で南九州独自の変化がみられるようになったものと考えた。それに対して政所式・中原式土器は、強い浸透力をもって流入し、早い段階で在地の土器と融合して、新たな型式的特徴をもった土器群を生み出したものと想定した。

さらに、このような人間集団の動態は、晩氷期以降の気候の温暖化など自然環境の

変化に伴い、縄文時代早期の早い段階で定住化や独自の土器文化の醸成を達成していた南九州だからこそ引き起こされた現象であると考えた。

そして上述のような異系統土器の流入・共存の実態からは、縄文時代早期の南九州の人々は、列島他地域に先立って独自の縄文文化を形成していたのだが、決して他地域の人々の流入を拒絶することはなく、柔軟に受け入れてきたことを示した。時間をかけて浸透・定着することで、やがては異系統の土器である押型文土器が南九州を席巻し、手向山式の段階では九州一円や山陰地方にまでその分布を拡大したことを確認した。この手向山式の移動は、縄文時代早期中葉から後葉に向かうにつれ、列島規模の温暖化がさらに進み、南九州と同様の環境がより東まで到達したことに起因するものと考えた。早い段階で南九州に進出した照葉樹林帯には、ナッツの種類やあく抜きの必要のないものも多く落葉広葉樹よりも有利であるとする見方がある一方、経済的基盤における生産性の低さと集約性の欠如も指摘でき、その結果として集落が小規模で移動性が高くなるとも考えられている。縄文時代早期中葉期に、九州島各地より南九州に移動してきた集団の移動性の高さは、このような情勢と関連するものと考えられる。

また、他地域からの集団の移動性の高さは、当該時期の南九州では竪穴住居跡がほとんど検出されておらず、竪穴住居以外の住居形態を採用していた可能性があることと無関係ではないであろうことも指摘した。上でみたように南九州の人々は、他地域からの集団の移動を拒絶することなく受け入れていたことが、同一遺跡内での異系統土器の共存という現象を生み出したものと考えた。ただし、出土土器の分析からは、あくまで貝殻文円筒形土器が主体的に出土し、それ以外の異系統土器は量的には客体的な場合が多いことが分かる。しかし、継続的な異系統土器の情報が浸透・定着することで、最終的には貝殻文円筒形土器は解体し、押型文土器の単純期が訪れたと理解した。その後、照葉樹林帯のさらなる拡大に伴って手向山式の段階には一気にその分布域を拡大した点を指摘した。